



TESTAMENT

booklet note

Japanese

SBT 1474

1970 年ザルツブルク音楽祭でのヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団によるモーツァルトとシュトラウス

彼にとってはめずらしいことではないが、ヘルベルト・フォン・カラヤンは 1970 年のザルツブルク音楽祭でも驚くほど多くの仕事を成功裏に完遂している。ウィーン・フィルと 2 つのオペラ、ヴェルディの《オテロ》を 5 公演とモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》を 3 公演、それに加えヴェルディのレクイエムも指揮している。ベルリン・フィルとは管弦楽作品のコンサートを 2 回、8 月 9 日はクリストフ・エッシェンバッハとのシューマンのピアノ協奏曲、バッハの管弦楽組曲ロ短調、ブラームスの交響曲第 1 番、12 日はモーツァルトの木管のための協奏交響曲 K.297b と R.シュトラウスの《ツアラトウストラはかく語りき》というプログラムだった。

1970 年 8 月 12 日のプログラムは、どちらも高度な演奏技術が必要とする作品であるが、ベルリン・フィルと超一流のソリスト達の本領を発揮するにはもってこいともいえる。ウェルナー・コーベスは公演後 8 月 14 日の *Linzer Tagblatt* 紙においてこう述べている。「片方は、繊細な銀細工のようなモーツァルトの協奏交響曲、もう片方は輝ける金塊のようなリヒャルト・シュトラウスの交響詩。2 作品の音楽的対比のすばらしかったこと！そしてそれらすべての中心にたつ指揮者は最良の演奏家たちがいかに力を発揮するかを完全に掌握していた。この晩のコンサートは永遠に忘れられないだろう・・・」

共通点も多いこの 2 作品だが、ベルリン・フィルの演奏歴は全く異なっている。モーツァルトはオーボエ、クラリネット、ホルンとファゴットのための協奏交響曲 変ホ長調 K.297b を 1770 年の 4 月にパリで書いた。元々はフルート、オーボエ、ホルンとファゴットのために書かれたものだったが、自筆譜はすでに残っておらず、最初からクラリネットを用いたヴァージョンで世に出ることとなる。ベルリン・フィルが初演したのは 1934 年 1 月 7 日、作曲されてから 150 年以上後のこ

とだった。初演は当時の首席がソロを演奏しエーリッヒ・ヴェンツケ（オーボエ）、アルフレッド・ビュルクナー（クラリネット）、マルティン・ツィーラー（ホルン）、オスカー・ローテンシュタイナー（ファゴット）－日本人の近衛秀麿が指揮をした。戦後、このオーケストは同曲を 24 回演奏している。近衛の時と同じソリストで 1946 年 2 月 3 日ティタニア・パラスにてセルジュ・チェリビダッケにより演奏されたほか、パウル・ヒンデミットも同じ場所で 1954 年 1 月に演奏している。（オーボエはカール・シュタインス）新しいフィルハーモニー・ザールで最初に演奏されたのは 1967 年 10 月のことで、指揮はサー・ジョン・バルビローリ、ソリストはローター・コッホ、カール・ライスター、ノルベルト・ハウプトマンとマンフレート・ブラウンだった。

ベルリン・フィルのディスコグラフィには 4 つのレコーディングが残っている。1937 年 1 月に録音された近衛秀麿とヴェンツケ、ビュルクナー、ローテンシュタイナーによるものが最初である（Columbia）。1966 年 2 月、同作品はカール・ベーム指揮、ソリストはカール・シュタインス、カール・ライスター、ゲルト・ザイフェルト、ギュンター・ピースクによって録音された（DG）。これについて 1971 年 8 月ヘルベルト・フォン・カラヤンも、カール・シュタインス、ヘルベルト・シュタール、ノルベルト・ハウプトマン、マンフレート・ブラウンをソリストとして録音を行っている（EMI）。この 20 年後には、カルロ・マリア・ジュリーニ指揮、ハンスイェルク・シュレンベルガー、アロイス・ブラントホーファー、ノルベルト・ハウプトマン、ダニエーレ・ダミアノにより再度録音された（Sony Classical）。

対する交響詩《ツァラトゥストラはかく語りき》は R.シュトラウスによって 1895 年から 96 年にかけて作曲された作品で、初演は作曲家自身の指揮によってフランクフルト・アム・マインで 1896 年 11 月 27 日に行われた。ベルリン・フィルでの初演は数日遅れの 11 月 30 日、首席指揮者であったアルトゥール・ニキシュによって行われている。1949 年以降、この作品がベルリンで取り上げられたのは 49 回にもものぼり、セルジュ・チェリビダッケ、カール・ベーム、ロリン・マゼール、ルドルフ・ケンペ、ズービン・メータ、ヘスス・ロペス＝コボス、小澤征爾、ゲオルク・ショルティ、マリス・ヤンソンス、ジョナサン・ノット、サカリ・オラモが指揮をしている。1961 年から 1987 年の間、ヘルベルト・フォン・カラヤンはこの作品をベルリンだけで 16 回演奏しており、また各地でのツアーでも頻繁に取り上げ、1970 年のザルツブルク音楽祭でも演奏したのである。

ベルリン・フィルは R.シュトラウスの作品の多くを頻繁に客演していたカール・ベームと録音しており《ツァラトゥストラ》も含まれている。ヘルベルト・フォン・カラヤンはこの作品を 3 度にわたり録音している。1973 年ベルリン・ダーレムのイエス・キリスト教会（DG）、1983 年フィルハーモニー・ザール（DG）、1987 年再度フィルハーモニー・ザール（Telemondial 映像）である。現在最も新しい録音は 1996 年のコンサートを録音したゲオルク・ショルティのものである（Decca）。

1970 年、ベルリン・フィルがモーツァルトの協奏交響曲をザルツブルク祝祭大劇場で演奏した際はオケの人員を減らした「対向配置」がとられ、木管ソリストは橋梁型にセンターに並ぶこととなった。結果、音響的にもヴィジュアル的にもカラヤンが選らんだスタイルは澁刺とした「パリジャン」スタイルからはほど遠いものだったかも知れないが、同時に、開放的に演奏された協奏交響

曲は祝祭にふさわしく装飾的な印象が与えられた。テンポは一律に保たれ、アレグロ部分もかなりゆったりと演奏されているが、重さは微塵も感じられない。ダイナミクスの対比も同様で、弱音部分が最大効果を発揮するために、フォルテ表示の部分もあえてメゾ＝フォルテ程度に控えられている。弦の入りは常にカンタービレが表示されているが、豊かで開放的で、全体をとおして楽器による色彩感は驚くべき完成度を誇っている。(カール＝ハインツ・マン *Salzburger Nachrichten* 紙 1970年8月14日) この評論家によると、オーケストラはカラヤンのモーツァルト解釈を完全に理解していたとのことだ。管弦楽団とソリスト両方の芸術的にほぼ完璧な演奏により、「本質的には極めて明瞭な音楽という芸術のあいまいな境界線とすばらしく精巧なメロディーラインの均衡を常に保っていた。

Linzer Tagblatt の評論家は、カラヤンが他ではほとんど見せたことのないリラックスした状態でこのコンサートに登場したことに着目している。「モーツァルトの繊細な協奏交響曲は聴衆に比類のない喜びをもたらしてくれる。ソリストのローター・コッホ (Ob)、カール・ライスター (Cl)、ゲルト・ザイフェルト (Hr)、ギュンター・ピースク (Fg) は、超一流奏者の貫録をみせた。さらには、指揮は気が付かないほど小さな動作で究極の精密さを持って行われた。」*Volksstimme* 紙の評論家は、「協奏交響曲の面白さは、この作品の大部分を形作る快活で緻密な対話にある。どの局面も、快い推進力で次につながってゆく。今回のコンサートは、まさにそれらのすべてが存分に発揮されたこの上ない演奏だったといえる。」

続いて R.シュトラウスの《ツァラトゥストラ》が演奏された。フル・オーケストラのために書かれ壮麗なサウンドを生み出すこの曲は、特にカラヤンが好んだ作品だ。ゲルハルト・ブルナーは熱狂的な突っ込みが完全に放棄された新境地をこのステージに見た。代わって、平和と平穏という新たな理想像が描き出されていた。「カラヤンが指揮するどんな作品においても、彼の指揮法における一貫性は否定されるものではない。《ツァラトゥストラ》に一貫性をもたらした熟練も否定できない。作品はきらめき輝いた。時に重々しく響き、時にかすかに光り、オルガンのように轟いた。私は鼓動が早まるのを感じたほどだ。すべてが絶対的に完璧でなければ、誰かが被害を受けるとでもいうのだろうか？時折、音楽を奏でるロボットではなく人間であることを思い出させるのはいけないことなのだろうか？」 (*Illustrierte Kronen-Zeitung* 紙, 1970年8月14日)

R.シュトラウスの作品 30 は時勢に従って、感情移入し過ぎたり、これ見よがしな表現方法がとられることが多い。そして、未だこの作品は R.シュトラウスの管弦楽法と音響創造が最も発揮された好例であり続けている。カール・レーブルは、これ以上すばらしく、より「現代的」な演奏を想像することができないと強調する。「どこが新しかったといえ、百人を超えるオーケストラで室内楽に近いアプローチを試み、これに成功したところだ。この方法によって、音響は極度に透明感と完璧なまでの明快さを得ることとなった。しかしながら、これはまた、感情的な部分と音楽の横溢をセーブすることによって完遂したともいえる。」 (*Express Wien*, 朝刊, 1970年8月14日)

ソリストについて

ローター・コッホ（1935-2003）はラインラント生まれ。エッセンのフォルクヴァングシューレでオーボエを学び始めたときはまだ 15 歳だった。ここで3年間、ヨハン・バプティスト・シュネーに師事する。卒業後、フライブルク・フィルハーモニー管弦楽団の首席オーボエ奏者となった。1957年、22歳の若さでベルリン・フィルハーモニーの首席オーボエ奏者に就任。1963年、同僚のフルート奏者のカール＝ハインツ・ツェラーとベルリン・フィルハーモニック・ソロイストを設立。管弦楽団での活躍に加え、室内楽やソロでの活動にも積極的だった。同時にベルリン芸術大学やハノーファー・コンセルヴァトワール、ベルリン・フィル・オーケストラ・アカデミーでも教鞭を執った。1991年にオーケストラを退団、その後はザルツブルク・モーツァルテウムの教授を務めた。

カール・ライスターは 1937 年、ヴィルヘルムスハーフェンに生まれる。クラリネットの最初の手ほどきは同じクラリネット奏者だった父親から受けた。1953年から 57年にかけて、ベルリン音楽アカデミーでハインリヒ・ゴイザーに師事。57年、ベルリン・コミッシェ・オーパーの首席クラリネット奏者となる。1959年の秋よりベルリン・フィルの首席クラリネット奏者に就任し、アルフレート・ビュルクナーの後任となる。ライスターはソリスト、室内アンサンブルの創設者もしくはメンバーとしての活躍も多かった。1973年から 1992年にわたり、ベルリン・フィル・オーケストラ・アカデミーで教鞭をとった。オーケストラを引退した後 1993年から 2002年まで、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学で教授を務めた。

ゲルト・ザイフェルトは 1931 年、ハンブルクに生まれ、11歳よりホルンを始めた。地元のコンセルヴァトワールで学び、同じハンブルクの国立歌劇場でホルン奏者を務めていた。1949年から 1964年まで、デュッセルドルフ交響楽団の首席ホルン奏者を務めた。ベルリン・フィルの首席であったのは 1964年から 1996年の期間である。彼もまた、ソリストとしても室内楽奏者としても大いに活躍する。ザイフェルトはベルリン・フィル八重奏団のメンバーであったし、「ベルリン・フィルの 13 人の木管奏者」の創立メンバーでもあった。さらにバイロイト祝祭管弦楽団にも 35年に渡って参加している。1970年よりベルリン芸術アカデミーで教鞭を執り、ベルリン・フィル・オーケストラ・アカデミーや日本でも指導を行った。

ギンター・ピースクは 1921 年ゲルリッツ生まれ。ベルリンのコンセルヴァトワールのオーケストラ・スクールでチェロを学び始めるが、後にファゴットに転向する。第二次大戦中、地域社会奉仕や徴兵のため一時音楽から離れるが、1945年 12月よりベルリンにて音楽の勉強を再開する。1946年よりベルリン放送管弦楽団で職を得、1年後にはベルリン・フィルの第二ファゴット奏者と

なる。1962 年よりオスカー・ローテンシュタイナーの後任として首席奏者を務めた。ピースクは様々な委員会で音楽家の後援に尽力し、ベルリンのシラー大学、ベルリン・フィル・オーケストラ・アカデミーで教鞭を執る。1987 年から 2001 年にわたり、ベルリン芸術アカデミーの教授を務めた。

Helge Grunewald, 2012

訳：小林茂樹